

## 学部留学生と日本語母語話者の大学生の

### 新聞社説の要約文の比較

#### —40字要約文から見た主題文の把握—

湯浅 千映子

#### 【キーワード】

要約、読解、文章構造、アカデミック・ライティング、学部留学生

#### 【要旨】

本稿は、大学初年次段階の学部留学生と日本語母語話者の大学生が書く新聞社説を原文とする要約文の分析を通し、両学生が原文中の筆者の主張（主題文）をどうとらえ、40字の要約文上にどう表現するかを明らかにした。原文及び40字要約文に佐久間（2010）の「情報伝達単位（CU）」を付与し、40字要約文に残存する原文のCUの出現傾向を比較分析した結果、多くの学部留学生が原文の主題文の位置を把握できていることが確認できた。一方で学部留学生は、その把握した主題文の内容を理解しないまま抜き書きすることが多く、原文のCUを再構成して意味が通る要約文にしてまとめることができずに、結果、文法や表現の誤り、統語上の誤用が現れるという特徴が見られた。

#### 1. はじめに

大学初年次のライティング教育は、「学習技術型」（基本的な学習技術の習得を目指す）（井下 2008 : 17-18）とされ、大学2年次以降の専門的な学修の土台となるアカデミック・スキル（例 ノートの取り方、レポートの書き方）の育成が主たる目的となる。筆者は、初年次必修科目「文章表現法」（学部留学生・日本人大学生が同じ教室で受講する）を担当し、課題図書（教員が指定した新聞社説）を要約し、自身の意見を述べる「ブックレポート」（書評）の完成を到達目標とする授業を行ってきた。「ブックレポート」は、河野（2018 : 17-19）の「テキスト批評」の枠組みを参照したもので、「目的の提示」、テキスト内容の「要約」、「問題提起」、「議論」、「まとめ」といった構成部分がある。この「ブックレポート」の他にも、大学初年次の学習項目は、ノートテイキングや講義後のリアクションペーパー、口頭発表用のレジюмеやPPT資料の作成など、多岐にわたる。そして、これらの項目には、読むことと書くことの横断的な技能とされる「要約力」が何らかの形で関わっている。「要約」は、汎用性の高いスキルと言える。

「要約」の定義について、日本語学会編（2018：990）の「要約」の項（佐久間まゆみ氏執筆）によると、「要約」とは、「理解主体（読み手・聞き手）が目的や内容に応じて、元の文章（「原文」）・談話（「原話」）の主旨を変えずにより少ない言語量（文字数・発話量）でまとめる言語行為」であり、「要約文」は、その目的と言語量の違いによって、「大意」（原文の構成に従い、内容の提出順を変えずに、主要な表現を用いて縮小する・原文の4分の1の「要約率」）と「要旨」（原文の最も重要な内容を示す「主題」や「結論」のみ、原文の内容の提出順を再構成してまとめる・原文の約8～10分の1以下の「要約率」）の2種が基本になるという。また、日本語学会編（2018：990）は、「①原文・原話の内容理解→②原文・原話の主題・結論の把握→③原文・原話の構造類型分析→④原文・原話の主題文と中心文の把握→⑤要約文の内容の再構成→⑥要約文の表現→⑦要約文の推敲」という7種の要約行為の過程があると述べている。

学生は、「ブックレポート」完成までの様々な局面において、「要約力」を駆使し、レポートを書く。まず、課題図書を読み、その内容を書いてまとめる「要約」という行為自体が、学生の課題図書への理解を深めることにつながるだろう。書いてまとめた要約文は、「概要」として、レポートを構成する1要素となり、また、課題図書の中から要点を取り上げ、レポート上で間接引用をすることで、「問題提起」の一部や自身の主張の根拠にもなる。こうした「要約」の構成部分を有するレポートを書くことには、学生自身の課題図書に対する理解度をレポート評価者の教員に表明するという意味もある。

要約は、文章・談話の理解と表現の両面にに関わり、個人差がある一方、複数の要約文に共通する理解と表現の類型があるという（日本語学会編 2018：990）。前述の「文章表現法」の授業で「ブックレポート」の指導の際、受講生の学部留学生数名から「課題図書の内容も著者の言いたいこと（主張）もわかるし、その言いたいことに対する自身の考えも頭にあるが、それを日本語の文章に組み立てて表すのが難しい」との声が上がった。彼らはなぜレポートにこのような苦手意識を持つのか。それは、学生自身が理解したことを正しく言語化する「理解の具現化」の難しさにその要因があるのではないかと考えた。「理解の具現化」という過程を、前出の「要約行為」と重ねて考えると、学部留学生は、④の原文の主題文や中心文の把握が困難である、または、④がわかっても、⑤「内容の再構成」と⑥「表現」が上手にできないといったことが推測される。

湯浅（2021）では、新聞社説を原文とする140字の「大意」の要約文調査を実施し、学部留学生の要約文が、原文の文章構造を反映せず、原文冒頭の「話題提示」の中心文を抜き書きする傾向が見られるとした。この場合、③の原文の文章構造分析の過程、④の原文の主題文を把握する過程が難しかったものと思われる。湯浅（2021）では、原文の主題や結論を用いて書く40字の「要旨」の調査も同時に行っていた。本稿では、大学生や学部留学生による40字という限られた文字数の要約文を分析し、④の主題文（中心文）の把握の有無という観点から、40字要約文の特徴を明らかにする。

大学のライティング教育を認知心理学の立場から論じた井下（2008：4）は、大学における書く力考える力を、「ディシプリン（学問分野）での学習経験を自分にとって意

味のある知識として再構造化する力」と定義し、学習したことを深い学びへと転移させる上で、「知識の再構造化」が重要であるとした<sup>1</sup>。学生は、ある文献から知識を受け取る際、自身にとって必要な知識は何かを考え、取捨選択をする。その選別した知識を組み立てて文章化する「要約」行為を通して、彼らは、その知識を正確に読み取り、理解しようとする。こうして学生自身の中に蓄積された知識は、既有知識となって、次のアウトプットの際にはそれを取り出し、レポートの作成などに活用できるだろう。

## 2. 先行研究

### 2-1 原文と要約文の文章構造に関する研究

市川（1978：126）は、「文段」を「文章の内部の文集合（もしくは一文）が、内容上のまとまりとして、相対的に他と区分される部分である」とし、「中心文」を「段落における中心的内容（小主題）を端的に述べている文」（市川 1978：127）とする。佐久間（2010：86）は、「段」の統括機能によって、「中心文」を「話題文」・「結論文」・「概要文」・「前提設定」・「補足追加」・「承前起後」・「展開予告」の7類16種に分類する。佐久間（1999：14）は、「中心段」の統括機能の配列位置と配置度数によって、「頭括型」・「尾括型」・「両括型」・「中括型」・「分括型」・「潜括型」の6種の「文章型」に分類し、要約文調査でその文章型を実証した。

### 2-2 日本語学習者の要約文についての研究

佐久間編著（1989：234）は、論説文の原文と日本人大学生の書いた要約文の「文章の統括関係」を、接続表現・提題表現・文章構成類型の3観点から分析し、要約が段落ではなく、「文段」に基づいてなされ、原文の「文章構成類型」が要約文の文章構造を反映するなどの特徴があるとした。佐久間編著（1994：197）は、日本人大学生と韓国人学習者が「尾括式」の論説文を読んでまとめた要約文の「文章構成類型」を比較し、韓国人学習者の要約文には、原文の結論がある結尾部を欠く例、展開部のみが不十分に残る例など、原文の「文章構成類型」に対する理解が不十分なものがあるという。

### 2-3 日本語学習者の要約文の指導に関する研究

日本語教育学会編（2005：365）の「要約」の項（藤村和子氏執筆）で、非母語話者は、原文が理解できていても、表現力が伴わず、理解した内容を要約文に正確に反映できず文法などの誤用となる場合、原文の結論を書かずに例の部分詳しく書く場合や要約者の意見を書く場合があり、「のではないか」「たい」などの文末叙述表現に着目させ、

<sup>1</sup> 井下（2019：16）は、調べることをまとめるレポート課題で、「憶えたことや調べたことを書き連ねるだけでなく、知識を筋道立てて論理的に考えて書く訓練が必要」とし、「自分の意見を、説得力を持って主張するためには、主張を裏づける証拠をあげ、知識を組み立て直すこと、すなわち、調べたことや授業で学んだことを『自分にとって意味があるように知識を再構造化する力』が必要」としている。

意見の文、説明の文など文の機能を見分けさせる指導が必要であるという。また、間接引用に必要な要約とその指導法について論じた中村・近藤・向井（2018：11）は、間接引用の要約は、引用という目的があり、与えられた文章の範囲内で行う読解や作文の要約のように、文の内容をまとめるだけの指導では不十分で、引用元の文脈に合わせた原文の語の表現の言い換えや自身の解釈の追加などの「調整」が必要だとしている。

### 3. 調査方法・分析方法

#### 3-1 調査方法

研究倫理の理念に即し、調査の趣旨に賛同した調査協力者の要約文を分析した<sup>2</sup>。いずれも初年次教育の授業を受講する大学生で、日本語母語話者の大学生（以下 JS）が 153 名、学部留学生（以下 IS）179 名である<sup>3</sup>。規定の文字数（140 字・40 字）のマス目が入った調査用紙を配布し、「2013 年 10 月 14 日付の日本経済新聞社説『ユニクロの脱・低価格に学ぶ』（778 字）を読み、140 字と 40 字にまとめなさい」と指示し、140 字→40 字の順で、筆記用具で記入してもらった。

#### 3-2 分析方法

まず、原文の新聞社説の記事本文の文章構造分析を行った。新聞社説の文章を佐久間編著（2010：28-44）の分析単位である「情報伝達単位（CU）」（←Communicative Unit の略）に区分し<sup>4</sup>、市川（1978：89-128）の文や段落の論理的関係である「接続関係」<sup>5</sup>、提題表現、叙述表現などの形式と内容のまとまりから「中心文」や「主題文」及び「中心段」を定め、「中心段」の出現位置から「頭括型」や「尾括型」などの「文章型」を認定した。次に、40 字要約文の表現分析を行った。原文と同様に JS と IS の 40 字要約文を、16 類 35 種の「情報伝達単位（CU）」に分割し、要約文の CU と原文となる新聞社説の CU を対応させて比較し、原文の CU が 40 字要約文にどの程度残存するかを調査した。要約文の各 CU 別の原文残存数が調査協力者の要約者総数（JS153 名/IS179 名）に占める割合を「原文残存率」とし、残存率の高い CU を中心に、40 字要約文に残る頻度と残った際の形態の変化を見た。残存する CU は、「O（原文 original と同じ）」と「P（原文を paraphrase）」と「E（誤用 error）」、「なし」に分類し、要約

<sup>2</sup> 調査は授業時間外に行い、調査用紙とともに「調査同意書」を文書で配布し、研究の趣旨と研究協力は絶対ではないことや個人名を出さない旨を伝え、研究使用の許可を取った。

<sup>3</sup> 学部留学生の 179 名の調査協力者は、四年制大学 3 校に所属する学生で、その母語の内訳は、中国語が最も多く、162 名で、ベトナム語が 12 名、ベンガル語 2 名、韓国語が 2 名、モンゴル語が 1 名であった。

<sup>4</sup> 「情報伝達単位（CU）」には、「文末叙述表現」・「節末叙述表現」・「修飾表現」・「引用表現」・「提題表現」・「状況表現」・「注釈表現」・「接続表現」・「応対表現」・「参照表現」・「感応表現」・「反復表現」・「省略表現」・「挿入表現」・「転換表現」・「非言語表現」の 16 類 35 種がある。

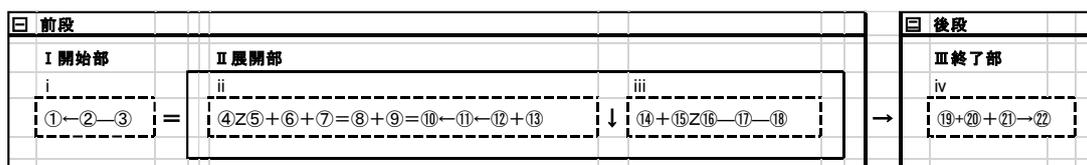
<sup>5</sup> 市川（1978：89-93）は、「接続関係」について、「順接型」・「逆接型」・「添加型」・「対比型」・「転換型」・「同列型」・「補足型」・「連鎖型」の 8 種の類型を挙げている。

文の CU が原文の「Ⅰ.開始部」、「Ⅱ.展開部」、「Ⅲ.終了部」のどの位置にあるか、原文のどんな機能の中心文の CU が要約文中に残存するかによって、JS と IS の 40 字要約文の類型を見出した。以上は、佐久間（1989・1994）の方法に従って行った。

目 前 段	Ⅰ 開 始 部	i	1	<p>1-1 ①カジュアル衣料店／「ユニクロ」を／運営する／ファーストリテイリングの／売上高が、／ 1-6 衣料品企業として／初めて／年間／1兆円を／超え、／世界ランキングでも／4位に／ 1-13 浮上した。2-1 ②ブランド戦略、／素材技術の活用、／グローバル化などが／功を奏した／結果だ。③ 3-1 他／日本企業の／参考に／なるところも／あるのではないか。</p>
			2	<p>4-1 ④ユニクロは／一般に／低価格で／成長した／「デフレの勝ち組」との／印象が／強い。⑤ 5-1 しかし／実際は／2004年に／「低価格を／やめます」と／宣言。⑥手ごろな／価格で／ 6-3 機能などに／特徴の／ある／商品を／開発してきた。⑦広告や／商品のデザインも／工夫し、 7-4 洗練された／イメージを／打ち出した。⑧東レと／防寒下着などを／素材から／共同開発。⑨ 9-1 「機能性下着」という／新しい／市場を／創造した。</p>
目 後 段	Ⅱ 展 開 部	ii	3	<p>10-1 ⑩こうした／デザインや／ブランド、／機能を／武器に／アジアへ／展開した。⑪今年8月末の 11-2 ユニクロの／海外店舗数は／446店で／全体の34%を／占める。⑫癖の／少ない／ 12-3 デザインは、／流行の品を／短い／サイクルで／提供する／欧米の大手企業と／直接的には／ 12-10 競合しない。⑬日常業務への／英語の採用も／早かった。</p>
			4	<p>14-1 ⑭衣料品という、／国内で／必ずしも／成長分野とは／見られていなかった／業界から／ 14-7 世界企業が／生まれた／意味は／大きい。⑮小売店が／売れ残りを／自由に／納入企業へ／ 15-5 返品できるという／古い／慣行が／残る／衣料品業界で、／生産管理まで／自社で／手掛け／ 15-13 責任を／持って／売り切る／緊張感を／持ち込んだ点も、／成長に／つながった。</p>
			5	<p>16-1 ⑯ファストリも／全戦全勝ではなく／野菜事業など／失敗も／多い。⑰そのぶん／撤退の／ 17-3 判断も／早い。⑱とりあえず／やってみるという／姿勢の表れだ。</p>
		iii	6	<p>19-1 ⑲いま／日本の産業界には／個々の企業の／挑戦よりも、／政府の成長戦略に／ 19-6 頼りたいという／空気が／見え隠れする。⑳横並び主義で／失敗を／恐れ、／慣行を／重んじ、 20-6 国内市場に／閉じこもりたい／気分も／まだ／残る。㉑デザインや／ブランド戦略の／ 21-3 重要性も／経営層まで／浸透したとは／言い難い。</p>
			7	<p>22-1 ㉒ファストリの／経営手法が／万全というわけではないだろうが、／参考に／すべき点は／学び、 22-7 市場戦略や／海外進出に／生かしていきたい。</p>

【図1】日本経済新聞社説「ユニクロの脱・低価格に学ぶ」(2013/10/14付・778字)の文章構造<sup>6</sup>

<sup>6</sup> I・II…「大文段」、i・ii…「文段」 1・2…形式段落、①・②…文番号、太字は中心文、太字傍線部は主題文。文の上部の数字(1-1、1-2…)は、文番号とCU番号をさす。



【図2】市川（1978）の文の接続関係による原文「ユニクロの脱・低価格に学ぶ」の文章構造

#### 4. 新聞社説の文章構造分析

【図1】・【図2】に、原文となる新聞社説の文章構造の分析結果を示した。この新聞社説の文章構造は、「I.開始部」と「II.展開部」が一つの文段となり、「III.終了部」で文章全体をまとめる2段構成の「尾括型」である。「I.開始部」では、文①でユニクロの売上に関する中心文（「話題文」）があり、文②・③が「II.展開部」や「III.終了部」の意見主張の予告となる。文②で、「売上1兆円超・世界4位」の要因を示し、文③の内容は、「III.終了部」の文⑲の意見主張と呼応する。文⑲は、意見主張の中心文（「結論文」）であり、原文全体の「主題文」に相当する。「II.展開部」でユニクロ成長の例が示され、それと対比する形で「III.終了部」の文⑱で「日本の産業界」の問題点を指摘し、主題文⑲で「日本の産業界」・「日本企業」に向けた提言がなされる。

#### 5. 新聞社説の要約文の表現の分析

日本語母語話者の大学生 JS153名と学部留学生 IS179名の40字要約文は、1文構成と2文構成のものがあり、JSで1文構成の要約文が142例・2文構成の要約文が11例、ISで1文構成の要約文が142例・2文構成の要約文が37例であった。

【140字要約文】

①「ユニクロ」を／運営する／ファーストリテイリングの／売上高が／世界ランキング／4位に／浮上した。②ブランド戦略、／素材技術の活用、／グローバル化などが／功を奏した／結果だ。③他の／日本企業の／参考に／なるところも／ありそうだ。④ファストリの／経営手法が／万全というわけではないだろうが、参考に／すべき点は／学び、市場戦略や／海外進出に／生かしたい。

【40字要約文】

ファーストリテイリングの（22-1P）／参考に（22-4）／すべき点は（22-5）／学び（22-6）、／市場戦略や（22-7）／海外進出に（22-8）／生かしたい（22-9P）。

【図3】日本人大学生 JS1 の要約文

【140字要約文】

①カジュアル衣料店／「ユニクロ」を／運営する／ファーストリテイリングの／売上高が、衣料品企業として／初めて／年間／1兆円を／超え、世界ランキングでも／4位に／浮上した。②ブランド戦略、／素材技術の活用、／グローバル化など／功を奏した／結果だ。③他の／日本企業の／参考に／なるところも／あるのではない。④市場戦略や／海外進出に／生かしていきたい。

【40字要約文】

ファストリの（22-1）／経営手法が（22-2）／万全というわけではないだろうが（22-3）、／参考に（22-4）／すべき点は（22-5）／学び（22-6E）。

【図4】学部留学生 IS1 の要約文

【図3】の JS1 の文①が原文の「I.開始部」の話題文①の内容で、文②と文③に原文の文②と文③の内容が続き、文④に原文の「III.終了部」の主題文⑲が残存する。

JS1の140字要約文は、この文④を主題文とする「尾括型」で、原文の文章型と一致する。40字要約文は、主題文②を用いて（「ファストリ」を正式名に換えて）、前置き表現となる「万全と」の部分を削除してまとめている。一方の【図4】のIS1の140字要約文は、文①から文③の内容が原文の話題文①～③と対応し、文④で、主題文②の意見主張の内容が続くが、前後につながりがない。IS1の40字要約文は、原文の主題文②の文頭から前置きの「万全と」も含め、CUを抜き書きし、「学び。」の連用中止形で終わっている。IS1は、原文中の意見主張の位置をある程度わかっているが、原文を複写するのみで、その意見主張の内容を正しく理解し、表現することができていない。

<p>【140字要約文】</p> <p>①「ユニクロ」を／運営する／ファストリテイリングの／売上高が／衣料品企業として／初めて／年間／1兆円を／超え／世界ランキングでも／4位に／浮上した。②ブランド戦略、／素材技術の活用、／グローバル化、／また／生産管理まで／自社で／手がけることも／成長に／つながった。③ファストリの／経営方法で／参考に／すべき点は／学び／市場戦略や／海外進出に／生かしていきたい。</p> <p>【40字要約文】</p> <p>①ファストリの（1-4P）／売上高が（1-5）／世界ランキングで（1-11P）／4位に（1-12）／浮上した（1-13）。②経営方法を（22-2P）／参考に（22-4）／生かしたい（22-9P）。</p>
--

【図5】日本人大学生 JS2 の要約文

<p>【140字要約文】</p> <p>①ユニクロを／運営する／ファストリテイリングの／売上高が、／衣料品企業として／初めて／年間／1兆円を／超えた。②ユニクロは／2004年と／宣言。衣料品という、／国内で／必ずしも／成長分野とは／見られていなかった／業界から／世界企業が／生まれた／意味は／大きい。③ファストリの／経営手法が／万全というわけではないだろうが、／海外進出に／生かしていきたい。</p> <p>【40字要約文】</p> <p>①ユニクロの（1-2P）／ファストリの（22-1）／経営手法が（22-2）／万全というわけではない（22-3E）。②海外進出に（22-8）／生かしていきたい（22-9）。</p>
---

【図6】学部留学生 IS2 の要約文

上記は、40字要約文が2文の例である。【図5】のJS2の140字要約文は、【図2】のJS1と同様、文①が原文の話題文①の内容で、文②は、「I.開始部」の文②「功を奏した」と「II.展開部」の文⑮「成長につながった」の内容上重なる部分をまとめて示し、文③に原文の主題文②が残存する。40字要約文は、話題文①の内容から始まり、文を改め、主題文②の内容を書いている。【図6】のIS2の140字要約文は、話題文①や「II.展開部」の文段冒頭の文④・文⑭の内容を根拠とし、主題文②の内容が後に来る。40字要約文は、主題文②全体を用いているが、前置きを省かず「万全というわけではない」と文を一度切ってエラーとなり、文を改め後半で主題文②の内容を続ける。IS2も、原文の意見主張の位置は理解しているが、内容の読み取りの面で問題がある。

## 6. 要約文に残存する情報伝達単位 (CU)

### 6-1 40字要約文の残存の全体的特徴と「頻出CU」の出現傾向

原文の「情報伝達単位 (CU)」が日本人大学生 JS153名と学部留学生 IS179名の要

約文にどの程度残存するのか、まず、JS と IS の CU の総数とその内訳について述べる。

本分析資料の新聞社説の原文の CU の総数が 157 であった。40 字要約文の CU の総数は、JS153 名で 1280CU (学生一人当たりの平均 11.95CU)、IS179 名で 1361CU (平均約 13.15CU) であった。このうち原文の表現と全く同じ「O」の CU 数は、JS が全 1280CU 中 583CU (約 46%)、IS が全 1361CU 中 906CU (約 67%) であった。つまり、JS よりも IS の方が原文と同じ表現を書き写しただけの 40 字要約文が多く、JS と IS の間に有意な偏りが見られた (カイ 2 乗検定で、 $\chi^2(1)=117.677$ ,  $p<.01$ )。

ここで、IS の要約文に見られる「情報伝達単位 (CU)」の特徴について述べる。原文と同じ「O」では、【図 4】・【図 6】のような、主題文を抜き書きした 40 字要約文があるほか、原文の「II.展開部」の文⑧「東レと防寒下着などを…」+文⑨「『機能性下着』という新しい…」を言い換えなしにそのまま用いた 5 例、「II.展開部」の文⑩「ファストリも…」、「III.終了部」の文⑪「横並び主義で…」・⑫「デザインや…」の各文の CU を言い換えずに全て用いた例など合計 17 例あった (JS の例は無し)。

IS の誤用「E」の CU 数は、JS が 29CU、IS が 86CU で、両者の間に有意な偏りがあった (カイ 2 乗検定で、 $\chi^2(1)=21.842$ ,  $p<.01$ )。JS・IS で共通に見られた誤用は、「ファストリテイリング」の記入間違いである。IS の誤用「E」の CU の例として、活用語尾や助詞の誤った省略 (「見え隠れす (る)」・「浮上 (し) た」・「経営手法 (を) 参考に」など) や誤った略語 (「産管理 (○産業管理)」・「市場戦 (○市場戦略)」・「海外出 (○海外進出)」・「隠れる (○見え隠れする)」・「浮した (○浮上した)」・「挑よりも (○挑戦よりも)」など)、文や節を途中で終え、意味を取り違える例 (「経営層まで浸透した (○浸透したとは言い難い)」・「経営手法が万全で (○万全というわけではないだろうが)」など)、文や節の前後で統語上のつながりがない例 (「ユニクロは初めて年間 1 兆円も超え、/デザインやブランド戦略の重要性が大切です」) が見られた。

言い換えの「P」の場合、原文の CU の内容が対応し、表現のみを言い換えた例と、原文の CU の内容が対応せず、原文にはない表現で言い当てた例がある。JS の「P」の例では、「今、日本の企業は政府に頼りがちで消極的なので、ファストリの積極的な姿勢を見習うべき」(JS122) と、原文の文⑬～⑭の日本企業の状況を「消極的」、対するユニクロの姿勢を「積極的」と包括的にとらえ、表現していた。一方の IS の「P」には、原文内容と CU が一対で対応しない例が少数しか見られないが、原文中の「1 兆円」「4 位」などの客観的な数値を「とてもにんきがあります」・「お金をたくさん儲けました」としたり、「近年発展がよくなった」などと表現する例があった。

「E (誤用)」を含めず、「O (原文と同じ)」と「P (原文を言い換え)」の CU が JS153 名・IS179 名の 40 字要約文にどの程度残存するのか (何名の要約文に登場するか)、残存数の多かった CU を【表 1】に示す。ここでは、要約者総数の半数以上 (JS が 76 以上・IS が 89 以上) が要約文に用いた CU を残存率 50%以上の「必須単位」と認定できる。しかし、40 字要約文の調査では、JS の場合の約 33% (原文⑫-1「ファス

トリの」)が最も高い残存率で、要約者(調査協力者)によってCUの残存状況にばらつきがあることから、残存率20%以上となったCUを「頻出CU」として、テキスト出現順に挙げた(表のカッコ内は要約者総数に占める割合である)。

【表1】JS・ISの40字要約文に残存する情報伝達単位(CU)の頻出CU

文段	JS153名の40字要約文		IS179名の40字要約文			
I	文①-2	「ユニクロ」を	34(22.22)	文①-2	「ユニクロ」を	48(26.82)
	文①-5	売上高が	36(23.53)			
	文①-10	超え	33(21.57)			
III	文②-1	ファストリの	50(32.68)	文②-1	ファストリの	53(29.61)
	文②-2	経営手法が	39(25.49)	文②-2	経営手法が	56(31.28)
	文②-4	参考に	41(26.80)	文②-4	参考に	36(20.11)
	文②-5	すべき点は	44(28.76)	文②-7	市場戦略や	47(26.26)
	文②-6	学び	42(27.45)	文②-8	海外進出に	46(25.70)
	文②-7	市場戦略や	33(21.57)	文②-9	生かしていきたい	46(25.70)
	文②-8	海外進出に	39(25.49)			
	文②-9	生かしていきたい	44(28.76)			

JSの40字要約文は、前置き表現の②-3を除き、主題文②の8CUで20%以上の残存が見られ、話題文①も3CUが20%以上残存する。一方のISは、主題文②の6CUの残存率が20%以上であるが、話題文は、①-2「ユニクロを」が20%を超えるのみで、残る12CUが10%以下であった。原文の意見主張を述べる主題文②のCUの残存傾向は、JS・ISとも、「I.開始部」の話題文①や「II.展開部」の各文よりも高かった。

### 6-2 40字を構成する提題表現・叙述表現の特徴と残存傾向

ここでは、JS・ISの書いた40字要約の文の成分について、文頭の主語や主題に相当する提題表現と文末の述部の叙述表現にどのような表現があり、原文のどのCUを用いているかを調査した。以下の【表2】に各上位5つの提題表現と叙述表現の40字要約文のCU(OとP、Eを含む)の例を頻度順に挙げる(カッコ内は原文で対応するCU)。

【表2】JS・ISの40字要約文に残存する提題表現と叙述表現の情報伝達単位(CU)

	JS153名の40字要約文		IS179名の40字要約文			
提題表現	1	「ユニクロは」 (文①-2「ユニクロ」を/文④-1「ユニクロは」)	28例	1	「ユニクロは」 (文①-2「ユニクロ」を/文④-1「ユニクロは」)	24例
	2	「売上高が」 (文①-5 売上高が)	15例	2	「経営手法が」 (文②-2 経営手法が)	21例
	3	なし(「経営手法を」が潜題)	12例	3	「参考にすべき点は」 (文②-4+文②-5 参考にすべき点は)	20例
	4	「ユニクロが」 (文①-2「ユニクロ」を/文④-1「ユニクロは」)	6例	4	なし	19例
	5	「日本の産業界は」 (文⑩-2 日本の産業界には)	5例	5	「日本の産業界には」 (文⑩-2 日本の産業界には)	9例
叙述表現	1	「生かしていきたい。」	12例	1	「生かしていきたい。」 (文②-9 生かしていきたい。)	25例
	2	「生かしたい。」 (文②-9 生かしていきたい。)	5例	2	「浮上した。」(文①-13 浮上した。)	9例
		「浮上した。」(文①-13 浮上した。)			「創造した。」(文⑨-4 創造した。)	
		「超えた。」(文①-10 超え、)		4	「学び。」(文②-6 学び、)	7例
	5	「(4位)になった。」 (文①-13 浮上した。)	4例	5	「言い難い。」(文②-6 言い難い。)	6例
	「学ぶべきだ。」(文②-6 学び、)					

JS の提題表現は、「Ⅰ. 開始部」と「Ⅱ. 展開部」の冒頭の主語である文①-2「ユニクロを」・文④-1「ユニクロは」の言い換えが最も多く見られた。対応する JS の叙述表現は、主題文②-9「生かしていきたい」が最も多く、次いで話題文①のユニクロの売上に関する「浮上した」や「超えた」が見られた。

IS の提題表現や叙述表現で、JS と共通する「ユニクロは」や「生かしていきたい」の他には、主題文②の CU を用いた「経営手法が」や「学び」が見られる。JS の 40 字要約文では、話題文①の内容と、主題文②の筆者の主張を組み合わせてまとめる例が多い一方、IS の 40 字要約文では、主題文②の筆者の主張の部分を中心に、40 字にまとめる例が多く見られた。よって、IS も原文の主題文を把握できていたことがわかる。

### 6-3 JS と IS の 40 字要約の主題文の CU の残存傾向

【表3】日本人大学生 JS153 名の 40 字要約文に見る主題文②の残存数と出現傾向

文	CU	情報伝達単位	日本語母語話者の大学生 JS 計153名							
			O		P		O+P		なし(Eを含む)	
			残存数	残存率	残存数	残存率	残存数	残存率	残存数	残存率
	22-1	ファストリの	24	15.69	26	16.99	50	32.68	103	67.32
	22-2	経営手法が	6	3.92	33	21.57	39	25.49	114	74.51
	22-3	万全というわけではないだろうが、	4	2.61	4	2.61	8	5.23	145	94.77
	22-4	参考に	29	18.95	12	7.84	41	26.80	112	73.20
22	22-5	すべき点は	9	5.88	35	22.88	44	28.76	109	71.24
	22-6	学び、	23	15.03	19	12.42	42	27.45	111	72.55
	22-7	市場戦略や	25	16.34	8	5.23	33	21.57	120	78.43
	22-8	海外進出に	23	15.03	16	10.46	39	25.49	114	74.51
	22-9	生かしていきたい。	15	9.80	29	18.95	44	28.76	109	71.24
	計		158		182		340		1037	

【表4】学部留学生 IS179 名の 40 字要約文に見る主題文②の残存数と出現傾向

文	CU	情報伝達単位	学部留学生 IS 計179名							
			O		P		O+P		なし(Eを含む)	
			残存数	残存率	残存数	残存率	残存数	残存率	残存数	残存率
	22-1	ファストリの	51	28.49	2	1.12	53	29.61	126	70.39
	22-2	経営手法が	40	22.35	16	8.94	56	31.28	123	68.72
	22-3	万全というわけではないだろうが、	19	10.61	14	7.82	33	18.44	146	81.56
	22-4	参考に	31	17.32	5	2.79	36	20.11	143	79.89
22	22-5	すべき点は	27	15.08	4	2.23	31	17.32	148	82.68
	22-6	学び、	31	17.32	3	1.68	34	18.99	145	81.01
	22-7	市場戦略や	43	24.02	4	2.23	47	26.26	132	73.74
	22-8	海外進出に	43	24.02	3	1.68	46	25.70	133	74.30
	22-9	生かしていきたい。	34	18.99	12	6.70	46	25.70	133	73.30
	計		319		63		382		1229	

【表3】・【表4】に、原文の主題文②を構成する 9CU が JS153 名・IS179 名中、何名の 40 字要約文に残存するかを、「O (原文と同じ)」と「P (原文を言い換え)」、「O+P」、「なし (E (誤用) を含む)」に分け、残存数と残存率 (%) を示した。

JSで主題文②-3以外の8CUの「O+P」の残存率が20%以上、ISで②-3と②-5・②-6以外の6CUの「O+P」の残存率が20%以上となった。「P」について見ると、JSの残存率がISよりも上回る。また、「O」について見ると、1CU(②-4)を除き、ISの残存率がJSよりも上回る。主題文②の9CUで、JSとISそれぞれの残存数を合計し、「O」・「P」・「なし(「E」を含む)」に分け、カイ2乗検定を行った結果、JSとISのグループの違いで「O」と「P」の間に有意な関連が見られた( $\chi^2(2)=110.346, p<.01$ )。このことから、ISの40字要約文は、助詞や文末を整えたり、表現を言い換えるなどせず、CUを部分的に抜き書きする表出の仕方が多く取られることがわかった。

残存するCU別に見ると、JSの場合、「ファストリの(22-1)」・「参考に(22-4)」・「すべき点は(22-5)」・「学び(22-6)」・「生かしていきたい(22-9)」の「O+P」の残存率がISを上回った。これらのCUは、「I.開始部」で主題文②を予告する文③-3「(他の日本企業の)参考に(なるところも)」や社説の見出し「脱・低価格に『学ぶ』」の「学ぶ」の部分とも対応する。JSは、原文の文章全体の構造や文章型を把握した上で、CUを選び、40字にまとめたものと思われる。

JSとISの主題文②の各9CUの残存の程度について、「O」、「P」と「なし(「E」を含む)」の3つに分け、カイ二乗検定を行った結果、JS・ISというグループの違いで「O」・「P」・「なし(「E」を含む)」の有意な関連があったのは、文②-3「万全というわけではないだろうが」( $\chi^2(2)=13.388, p<.01$ )、文②-5「すべき点は」( $\chi^2(2)=37.755, p<.01$ )の2CUであった。文②-3が前置き表現のCUであり、文②-5が実質的な意味を持たない機能動詞のCUであり、いずれも省略が可能なCUである。したがって、JSの場合、その多くが文②の主題文の中から省略できるCUは使わずに40字要約文を作るのに対し、ISは、文②の主題文中のCU同士の内容の重要度を考慮せず、全て抜き書きして40字要約文を作る場合が多いと言える。

以下は、JSとISの主題文②の8CUをより多く含む40字要約文である。

- ・ファストリの／経営手法で(P)／参考に／すべき点は／学び、市場戦略や／海外進出に／生かしていきたい。(JS082)
- ・ファーストリテイリングの(P)／経営手法の(P)／参考に／べき点を(P)／学び、生かしていきたい。(JS073)
- ・ファストリの／経営手法が／参考に／すべき点は／学び、市場戦略や／海外進出に／生かしていきたい。(IS058)
- ・ファストリの／経営手法が／参考に／べき点は／学び、市場戦略や／海外進出に／生かしていく(P)。(IS109)
- ・経営手法が／万全というわけではないだろうが、参考に／べき点は／学び／海外進出に／生かしていきたい。(IS002)
- ・ファストリの／経営手法が／万全して(E)、参考に／べき点は／学び、海外進出に／生かす(P)。(IS065)

IS058 は、前置きの 22-3「万全と…」を省くのみで、22-5「(参考に) すべき点は」の提題の助詞「は」を言い換えず、原文をそのまま言い換えなしで書いている。IS109 は、文末を「生かしていく」と短く調整している。また、JS073 のように、40 字にまとめる過程で目的格の「を」や所有格「の」を換えるなどし、文を整える例もある。IS002・IS065 は、前置きの 22-3「万全と…」の CU を含む 40 字要約文であるが、IS002 の場合、「経営手法が」で始まり、「何の (経営手法が)」の部分が隠れ、意味が通らない。IS065 の場合、「万全して」の部分を誤って読み取っている。以上の例から、IS は、原文の文章構造を理解し、主題文の位置を把握できているものの、要約文中にどの CU を選んでまとめるべきか、また CU の内容や CU の機能、CU 同士の文成分のつながりを理解した上で 40 字要約文にまとめるまでに至っていないことがわかった。

#### 6-4 JS と IS の 40 字要約文の主題文以外の高残存 CU の出現傾向

原文の主題文②を除き、残存率が 10%以上 (JS153 名中 16 名以上、IS179 名中 18 名以上) となった CU を「高残存 CU」(前節の「頻出 CU」を含む) として、その残存数と残存率を比較する。JS で 15CU、IS で 4CU が「高残存 CU」であった。

次頁【表 5】を見ると、JS の場合、まず、「I. 開始部」の話題文①の 10CU が見られた。中には、文①-9「1 兆円を」、文①-12「4 位に」などの数値も残存する。JS は、ニュース性の高い話題文①の方を取り上げ、40 字要約文にする傾向がある。

JS の場合、話題文①の他には、「II. 展開部」の冒頭の主語「ユニクロは (4-1)」、 「III. 終了部」の冒頭の主語「日本の産業界には (19-2)」が高残存となった。「ユニクロは (4-1)」で始める 40 字要約文の場合、文⑤の「低価格を (5-4)」、「やめますと (5-5)」が続くことが多い。JS は、見出し「ユニクロの脱・低価格に『学ぶ』」に着目し、見出し内の情報を重要だと判断して要約文に含める場合がある<sup>7</sup>。以下は、JS で、見出しの「脱・低価格」を 40 字要約文とした例である。「脱・低価格」を進めたという事実だけでなく、その事実がもたらした結果(「年間 1 兆円超」など)についても述べている。

- ・ユニクロは／脱・(P)／低価格を／したが (P)／衣料品企業として／初めて／年間／1 兆円を／超えた (P)。(JS042)
- ・ユニクロは、／脱・(P)／低価格を／進め (P)、洗練された／イメージを／打ち出し (P)／国内外で (P)／成功をおさめた (P)。(JS086)
- ・ユニクロが (P)／脱 (P)／低価格から (P)／洗練された／イメージへ (P)／移行 (P)。機能性

<sup>7</sup> 40 字要約文自体を名詞止めの見出しの形式でまとめる例が JS で 8 例、IS で 2 例見られた(「ファーストリテイリングの売上高が、衣料品企業として初めて年間 1 兆円を超え世界 4 位」(JS30)・「カジュアル衣料店「ユニクロ」を運営するファーストリテイリングの売上高。」(IS34))。見出しやタイトルなどの「表題」も要約の一種とされるが、これは、40 字という厳しい文字制限のある要約文に特徴的な形式であると言える。

(P)、デザイン性を (P) / 武器に / 海外へ (P)。(JS141)

- ・2004 年に / 「低価格を / やめます」と / 宣言。手ごろな / 価格で / 機能などに / 特徴のある / 商品を / 開発した (P)。(IS1015)
- ・ユニクロは / 「低価格を / やめます」と / 宣言。「機能性下着」という / 新しい / 市場を / 創造した。(IS106)
- ・ユニクロは / 「低価格を / やめる」と (P) / 宣言。市場戦略や / 海外進出に / 生かしていきたい。(IS107)
- ・ユニクロは / 低価格を / やめて (P)、デザインを (P) / 工夫し、他の (E) / 会社に (E) / 市場戦略や / 海外進出を / 学び (E)。(IS122)

【表5】日本人大学生 JS153 名の 40 字要約文に見る主題文以外の高残存 CU の出現傾向

文	CU	情報伝達単位	日本語母語話者の大学生 JS 計153名								
			O		P		O+P		なし(Eを含む)		
			残存数	残存率	残存数	残存率	残存数	残存率	残存数	残存率	
1	1-2	「ユニクロ」を	14	9.15	20	13.07	34	22.22	119	77.78	
	1-3	運営する	16	10.46	1	0.65	17	11.11	136	88.89	
	1-4	ファーストリテイリングの	13	8.50	14	9.15	27	17.65	126	82.35	
	1-5	売上高が	27	17.65	9	5.88	36	23.53	117	76.47	
	1-8	年間	17	11.11	3	1.96	20	13.07	133	86.93	
	1-9	1兆円を	25	16.34	5	3.27	30	19.61	123	80.39	
	1-10	超え、	11	7.19	22	14.38	33	21.57	120	78.43	
	1-11	世界ランキングでも	2	1.31	19	12.42	21	13.73	132	86.27	
	1-12	4位に	12	7.84	9	5.88	21	13.73	132	86.27	
	1-13	浮上した。	4	2.61	13	8.50	17	11.11	136	88.89	
	4	4-1	ユニクロは	24	15.69	4	2.61	28	18.30	125	81.70
	5	5-4	低価格を	14	9.15	7	4.58	21	13.73	132	86.27
		5-5	やめると	3	1.96	19	12.42	22	14.38	131	85.62
18	18-2	やってみると	5	3.27	12	7.84	17	11.11	136	88.89	
19	19-2	日本の産業界には	6	3.92	20	13.07	26	16.99	127	83.01	

【表6】学部留学生 IS179 名の 40 字要約文に見る主題文以外の高残存 CU の出現傾向

文	CU	情報伝達単位	学部留学生 JS 計179名							
			O		P		O+P		なし(Eを含む)	
			残存数	残存率	残存数	残存率	残存数	残存率	残存数	残存率
1	1-2	「ユニクロ」を	9	5.03	39	21.79	48	26.82	131	73.18
2	2-4	功を奏した	11	6.15	8	4.47	19	10.61	160	89.39
19	19-2	日本の産業界には	12	6.70	7	3.91	19	10.61	160	89.39
21	21-3	重要性も	9	5.03	9	5.03	18	10.06	161	89.94
1	1-5	売上高が	11	6.15	3	1.68	14	7.82	165	92.18
4	4-1	ユニクロは	12	6.70	2	1.12	14	7.82	165	92.18

IS では、見出しのみに登場する「脱」を用いた要約文はなく、原文の「低価格をやめます」を用いた要約文があった。IS107 の例では、後文に主題文②の内容を続けているが、接続する 2 文の内容上のつながりはない。IS122 も文⑤・⑦の内容に、主題文②の意見主張がつながっており、文全体の意味が通らない。また、「他の会社に」となる

と、ユニクロが他企業から学ぶという逆の意味になってしまう。IS015 の例では、原文の CU をそのまま用いているが、主語が欠けており、動作の主体が誰か分からない。

【表 6】を見ると、IS では、高残存となった CU が JS と比べて少ない。JS で高残存であった話題文①の CU の中で、IS でも高残存となるのは、「ユニクロを (1-2)」のみである。IS の場合、40 字要約文に用いる CU が主題文②の部分に集中し、その他の残存する CU が原文の「Ⅱ.展開部」や「Ⅲ.終了部」の文段全体に分散している。なお、「Ⅱ.展開部」の提題表現の CU 「ユニクロは (4-1)」、「Ⅲ.終了部」の提題表現の CU 「日本の産業界には (19-2)」の「O+P」と「E」の残存率は、カイ 2 乗検定で JS と IS 間の有意差は見られなかった。

以下に「日本の産業界には (19-2)」を含む 40 字要約文の例を挙げる。この主語にこの CU を後続させ、40 字要約文にするのか、JS と IS でその方法が異なっていた。

- ・「ユニクロ」を／運営する／ファーストリテイリングの／経営手法は (P) ／日本産業界に (P) ／参考に／なる (P)。(JS057)
- ・ファーストリテイリングの (P) ／やってみるといふ／姿勢は (P) ／日本の産業界が (P) ／参考 (E) ／すべき点である (P)。(JS121)
- ・ファストリは (P) ／失敗も／多いが (P)、市場戦略や／海外進出などを (P)、／日本の産業界も (P) ／学ぶべきだ (P)。(JS138)

JS の場合、原文の主題文②で省略されていた行為の主体を補う形で「日本の産業界には (19-2)」を出現させ、これを提題表現とし、「参考すべき点」・「参考になる」・「学ぶべきだ」と主題文②の中核を成す CU を続け、文にしている。JS121 の 40 字要約文には、JS で高残存の CU 「やってみるといふ (18-2)」も見られる。

- ・今／日本の産業界には／デザインや／ブランド戦略の／重要性も／経営層まで／浸透したとは／言い難い。(IS047)
- ・いま／日本の産業界には／個々の企業の／挑戦よりも、／政府の成長戦略に／頼りたい (E)。(IS070)
- ・ユニクロは (E) ／日本の産業界に (P) ／企業の (P) ／挑戦よりも／政府の成長戦略に／頼りたい (P) ／空気が／見え隠れする。(IS126)
- ・日本の産業界 (P)、／横並び主義で／失敗を／恐れ、慣行を／重んじ、デザインや／ブランド戦略が (P) ／重要だ (E)。(IS017)

一方の IS は、提題部分と叙述部分の意味がつながらなかつたり (IS047)、叙述表現「頼りたいと…」を途中で終わったり (IS070)、主語を取り違えて「ユニクロは」で始めて意味が変わったり (IS126)、「Ⅲ.終了部」の文⑱～文㉑の CU を言い換えず、抜き書きしてつなげ、「重要だ (E)」と誤った解釈が入ったり (IS017) と、JS の要約

文のように、「日本の産業界には (19-2)」を、成功したユニクロに関する記述と対比しながら、提題表現として正しく用いる例は見られなかった。

## 7. まとめ

新聞社説という論説文で 40 字要約文を書く場合、原文の「意見主張」を伝える主題文の CU を中心に抽出し、それらを再構成して書くことが望ましい。

本稿では、日本語母語話者の大学生と学部留学生の手による新聞社説の要約文の文章構造の類型を明らかにした。分析の結果、学部留学生は新聞社説の原文の主題文や中心文の位置の把握はできており、その主題文の内容を用いて 40 字要約文を書いていることが、CU の残存状況から確認できた。しかしながら、日本語教育学会編 (2005 : 365) が指摘する通り、本分析資料の要約文においても、読んで理解した内容を正確に要約文に反映できず、文法や表現、統語の面でエラーとなる例が見られた。

「ブックレポート」の「概要」を書く、間接引用をするといった場面で、学部留学生に向けた要約文の指導を行う際には、課題図書から必要な内容を取り出す段階で終わらず、取り出した内容を整理し、レポート上で必要な形式 (指示表現や接続表現) を補ってつなげてまとめ、表現するまでを支えていく必要がある。日本語教育学会編 (2005) の指摘にあった、原文の文法や文の機能を正確に読み取り、正しく表出させることはもちろん、中村ほか (2018) の言う、レポートの文脈に合わせた原文の語句の言い換えなどの調整をする必要がある。そのためには、目の前の文献に書かれた知識が、上級年次の段階のより深く、専門的な学修にも活かされることを想定し、考えながら文献を読み、必要な知識を見極め、学生自身で学び取っていくという姿勢が肝要となるだろう。

## 参考文献

- 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 井下千以子 (2008) 『大学における書く力考える力 認知心理学の知見をもとに』東信堂
- 井下千以子 (2013) 「思考し表現する力を育む学士課程カリキュラムの構築」関西 FD 編『思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント』ミネルヴァ書房
- 井下千以子 (2019) 『思考を鍛えるレポート・論文作成法 第3版』慶応義塾大学出版会
- 河野哲也 (2018) 『レポート・論文の書き方入門 第4版』慶応義塾大学出版会
- 佐久間まゆみ編著 (1989) 『文章構造と要約文の諸相』くろしお出版
- 佐久間まゆみ編著 (1994) 『要約文の表現類型—日本語教育と国語教育のために—』ひつじ書房
- 佐久間まゆみ (1998) 「段落区分と要約文の表現方法」『国文目白』44号, 日本女子大学国語国文学会
- 佐久間まゆみ (1999) 「現代日本語の文章構造類型」『日本女子大学紀要文学部』48号
- 佐久間まゆみ編著 (2010) 『講義の談話の表現と理解』くろしお出版
- 佐久間まゆみ (2018) 「要約」の項解説 日本語学会編『日本語学大辞典』東京堂出版

中村かおり・近藤裕子・向井留美子（2017）「大学初年次のレポート作成指導で引用をどう扱うか」『日本語教育方法研究会誌』23号

中村かおり・近藤裕子・向井留美子（2018）「アカデミック・ライティングにおける間接引用で求められる要約とは」『日本語教育方法研究会誌』25号

藤村和子（2005）「要約」の項解説 日本語教育学会編『新版 日本語教育事典』大修館書店

湯浅千映子（2021）「新聞社説と要約文の表現類型—学部学生・学部留学生による140字大意の比較—」『日本語／日本語教育研究』12号，日本語／日本語教育研究会

## 謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP 21K02641 の助成を受けたものです。

（大阪観光大学教授）